

---

# 時代を超えて、時なずむ

松の慎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時代を超えて、時なずむ

### 【Nコード】

N 2 2 3 4 B

### 【作者名】

松の慎

### 【あらすじ】

告白がしたくてもできない少女。だけど少女の強い思いで、歴史が動く……。時代を超えて愛を貫いた少女の感動ストーリー！。

「あのね、暁っ。あたしずっと前から暁のこと……………うん  
あ……」

告白途中

突然息が切れる発作が起こる。

「亜芽?!大丈夫かつ!!」

「う……………うん」

のどを押さえる。

まだ痛みが残る。

まただ……………

「まったくー、亜芽はのど弱いんだから気をつけるよー?」

前にも同じことが起きた。

告白の途中に発作がきて、結局告白できないまま。

そう、まるで体があたしに告白をさせないようにしてるかのように。

「あ、やべー俺部活始まるわ!じゃあ俺行くなっ」

「あ……………うん、頑張って」

「おう!」

暁は教室を出て行く。

残ったあたしも、家へ帰る。

なんだろう・・・

どうして告白できないんだろう。  
しないんじゃない、できない。

なんで？

帰る途中、ごみ捨て場に古い一冊の本が落ちていた。

「うわ、ぶ厚っ」

それを拾い上げた。  
題名を見て驚いた。

「愛無町の・・・歴史？」

愛無町、それはまさしく今あたしが住んでるこの町だ。  
ページを開く。

「なにになに・・・昔この町には亜芽姫というお姫様が住んでい  
て・・・」

亜芽姫？！

あたしと同じ名前だ・・・  
そのときだった。

「きゃあっ！ー！」

とてつもなく眩しい光が本から出た。  
思わず目を閉じる。

ゆっくりと目を開けると・・・

「じじ……どじ？」

商店街……？

愛無町じゃないの？

でもなんとなくこの風景に見覚えが……

「それにしても殿は残酷ですな。姫を無理やり婚礼させてしまうとは」

「そう言っな。まあ誰が見ても姫と暁が愛しあってるのは一目瞭然だがな」

姫と暁という言葉に耳が傾く。

声がしたほうを向くと、お侍さんが談話をしていた。

「姫って、亜芽姫？！」

「そ、そうだが……ひ、姫様！」

「なにゆえお一人でこのようなところにっ」

「へ」

え、なに？

姫ってあたしに言ってるの？

そりゃ確かにあたしは亜芽だけど……ってそうじゃなくて！  
ってことはあたしと亜芽姫似てるんだ！

「なんでもないでーっす！」

あたしはその場から逃げるようにして離れた。

だいぶ歩いていくと、お城が見えた。

そういえば姫っていうくらいだからあそこに住んでるんだろっなあ。

・・・ん？

そういえばさつき、姫と暁が愛し合ってるって言ってたっけ？  
亜芽姫と暁が愛し合ってる・・・だけど、姫は無理やり結婚させられる？

どういうこと？

「・・・よし」

あたしは城へ駆け出した。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「暁・・・。明日には婚礼になってしまうのに・・・」

もしあたしが姫じゃなかったら、暁と幸せになれたのに。  
あたしが姫じゃなければ・・・

「はい、亜芽姫っ」

「え？！同じ顔っ・・・！」

「ここまでそっくりなら武士が間違うのも分かるわー」

あたしと同じ顔の女の子が、城の庭に入ってきた。

これは・・・夢？

「あなたは・・・」

「あたしは亜芽。ちょっと聞きたいんだけど、暁とは恋人？」

「え・・・」

どうして暁のこと知ってるの？

あなたは誰なの？

うっん、そんなことよりも・・・暁はあたしの恋人なの？

「あたしは明日婚礼を挙げる身。暁とはなにも・・・」

「じゃあ好きじゃないの？」

「す・・・き、です」

「じゃあなんでっ？！」

「暁はあたしの勉強を見るお世話役で・・・」

あ、あ、あ。

なんか分かってきちゃったかも。

この2人、身分違いの恋ってやつなんだ。

しかも明日結婚ってわけでもう一生結ばれることがないってわけか・  
・

「身分が違ったら思いを伝えちゃいけないって誰が決めたの？」

「それは・・・」

「あたしはそうは思わない！亜芽姫が暁を好きなように、暁だって  
亜芽姫を好きなんだからそんなの変だよっ」

あたしが告白できないわけが分かった。

亜芽姫・・・亜芽姫が今、この時代で暁に告白しないせいだ。

たぶんあたしは亜芽姫の生まれ変わりかなんかで、時を越えても前  
世のこの記憶が残ってるせいなんだ。

「・・・あたしは暁が好きです。やっぱり暁が忘れられない・・・」

「そうだよ。その意気！で、当の本人の暁は？」

「父上があたしの婚礼が終わるまで、あたしと2人きりにさせない  
ために仕事の余暇を与えていて・・・今は実家です」

「うわー、余暇っていうより邪魔者退治ってわけか。で、家は？」

「ここから近くの商店街にある、一番大きなお屋敷です」  
「わかった」

あたしは、城を出ようとする。

「あたしがきつと暁連れてくるから！」

そして、走り出した。

商店街って、さっきのところよね。

一番大きな家が……

商店街は人であふれる。

仕方ないから人をかきわけて進む。

武士に会ったときはなるべく顔をうつむけて、見せないようにした。

やっぱりこのままなんて良くないよね。

好きでもない人なんかと結婚しても、なんの意味もない。

「あ、いた。暁っ」

「え……姫?!なにゆえここに……って、違う。姫ではない  
?あなたは……」

「やっぱり好きな人はちゃんと見分けれるのね」

読書をしていた暁のそばに寄る。

暁は驚きのあまり本を落とした。

「あたしは亜芽。ねえ、明日亜芽姫結婚しちゃうよ?良いの?」

「あ……はい。存じております」

「だって暁は亜芽姫が好きなんでしょっ?!」

「俺は商人の家系であって、姫のお世話ができるのも偶然学問に心

得があつたからのみ。だから・・・だから、おめでたい限りにぎざいます」

暁は微笑する。

「ほんとにそんなこと思つてるの？」

あたしは手を握り締める。

「伝えなきゃ伝わらないよ・・・伝えられるのに伝えないなんておかしいよ！あたしはいやだよっ！！」

「あ、亜芽殿」

「あたしは暁に伝えたいっ・・・確かにこの時代は恋をするのも大変かもしれないけど、ただと言わなきゃどうにもなんないよっ！！」

涙があふれる。

あたしたちみたいに簡単に好きだと言える時代じゃないってことも分かつてる。

身分差はどうにもならないってことも分かつてる。

だけど、それでも・・・

「亜芽殿、あなたは一体・・・」

「・・・あたしは、今から500年後に生まれる亜芽姫の生まれ変わり。あたしも暁に恋をした」

いつの時代でも好きあつていたなんて、すごいよ。  
でもそれは叶わなきゃなんの意味もない。

「何回出会っても、思いを伝えないことには始まらないよ・・・」

「生まれ、変わり・・・ほんとうに？また姫と出会えるというのか」  
「だけどこの時代で2人がくっついてくれなきゃ、あたしたちもだめなの」

今、暁を城へ連れてくることができたならきつと姫は思いを伝えるだろう。

だって、あたしだもん。

姫は、あたしと同じ。

「亜芽殿。身分よりも家柄よりも出世よりも大切なのは・・・」  
「んなの決まってるでしょ」

ニヒツと笑いながら言った。

「愛！」

すると、暁は一瞬ふっと笑ったかと思うと、穏やかな笑顔を見せた。

「・・・心がふつきれました。姫のもとへ行きます」

「ほんと?!」

「はい。ありがとう、亜芽殿」

あたしと暁は、急いで城へ向かった。

暁にもいろんな思いがあるんだろう。

商人と將軍の娘とじゃ、確かに身分的には不釣り合いかもしれない。

恋をするなんてもつてのほかかもしれない。

だけど、やっぱり一番大切なのって愛だよ。

愛だと思っから、あたしは2人に前に進んでもらいたい――

— . . .

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「姫、明日は婚礼ですな」

「氏家様．．．」

「元氣がありませんね。どうしたのです？明日のためにはやく元氣になってくださいよ」

「．．．．．」

カサカサと植木を裂く音。

「あんたと一緒じゃ姫は幸せにはなんないわね」

「なっ．．．」

「姫、暁連れてきたよ」

氏家とやらを押しつけて、姫の前に暁を押し出す。

「姫．．．」

「あ．．かつき。暁．．．」

2人は抱き合う。

そして、言う。

「暁、あたしはやっぱりあなたが好きです。このままさらってくれますか？」

「喜んで」

あたしは2人を見て微笑む。

ああ、良かった・・・って心から思えるの。

「氏家様。あたしは暁と駆け落ちします。ごめんなさい」

「なにを言うのです、姫！明日なのですよ?!」

「やっぱり好きな人とずっと一緒にいたいの」

安定した未来よりも

なに不自由ない生活よりも

お金がなくても暁といればそれだけで、幸せ。

そうだよ、亜芽姫。

あたし、それが言いたかったの。

「そろそろ時間かな・・・」

体が透けていく。

もとの世界へ戻る時間だ。

「じゃあ姫、暁。ずっと幸せにね!」

「あつ・・・あの、あなたは・・・」

「あたしもきつと暁と幸せになるから」

そう言っであたしは消える。

目が覚めて気がついたときには、自分の部屋のベッドの中だった。  
目をこすって起き上がる。

「夢・・・?」

さっきのは全部夢？

そりゃそうだよー、あんなこと実際に起こるわけないもんね。笑いながら、あたしは散歩に出かけた。

そして、ごみ捨て場のほうをチラッと見た。すると、ぶ厚い本が捨ててあった。

「この本っ・・・」

それを拾う。

その本があったことよりも、本自体に驚いた。

「愛有町・・・！」

前見たときは、『愛無町の歴史』だったのに・・・  
もしかして、歴史は変わった？

あたしは本を開こうとした。

そのとき、あたしを呼ぶ声がした。

「あれー亜芽？」

「あ、暁」

「めっちゃ偶然だな」

・・・うつん、きつと偶然なんかじゃない。  
これはたぶん運命。

亜芽姫と暁がもたらしてくれた奇跡。

「ねえ暁。あたしね、ずっと前から暁のこと好きだったんだよ」

風が吹く。

あたしの手の中にある本がパラパラとページをめくる。

—— 亜芽姫とその世話役・暁は行方をくらましたが、誰も知らないその場所で、ずっと幸せに暮らしました ——

f i n

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2234b/>

---

時代を超えて、時なずむ

2010年12月18日14時39分発行